

ampp-024

世界樹の断面

中田満帆

2024

a misasing person's press

『古今和歌集』に、ただ一首収められた酒井人真という男が、それだけで千年以上も名を残していることが羨ましくてならない。

この『世界樹の断面』にも、ただ一首、〈暗黒理力〉の渾融によって千年は残りそうなのがある。

それはどれか言わないでおこう。

森 忠明

もぐり

*

theme 5

美しい仕事 20

間奏曲 35

世界樹の断面 49

スモール・タウン

ルードボーイたち

蝦蟇眠る 93

77 58

*

あとがき

106

*

theme

*ギリシア語 *thēnai* に由来し、〈置かれたもの〉を意味する。——『世界大百科事典（旧版）』より

夏の嵐 かぜにまぎれて去るひとかげを追って
いまだ正体もなく

so I knew, くちくもりつつテレビにて深夜放送受信が終わる

ぼっ
かりと暗くなりたり郊外の花を摘みゆく女がひとり

やがてまたぼくが終わろうとする夜に蟬のぬけがら一切を拒む

青嵐去って一輪挿すだけの花壇がひとつ行方不明

That's a bloom, やがて消え去る色たちに報いるために死など撰ばず

俳優も暗喩に過ぎず夜がまた建築されし炎天の星

駅じゅうにおなじ女が立ちふさぐ地上に愛はなしと識りたり

夏またぎ 自転車通る一筋の車輪の跡が光るゆうぐれ

雨光るルーフの上の蟻たちが落ちてゆくなりせつなの彼方

箒すら刑具おもわす蒼穹^{あおぞら}に逆立つ藁の幾本を抜く

夏盛る空気人形一体が陽に焼かれつつおれを視るなり

ソフトボールする少女らがいて茫洋たるグラウンドにあふれり

死ぬためのところがまえもままならず驟雨のちの室外機啼く

“Cabaret London” 滅後の愛をいつわりし女主人のヒールが高い

めぐりたりる星の羅針が定まらぬきみの両手の運命線よ

声あらば吼えよという声がして一瞬夢のなか立ち止まる

探してる　きみの匂いがまだ残る街のはずれの未舗装道路

ゆうづきの充ちる水桶ゆれながらわれを誘う午後の失意よ

手鏡を失う真夏・地下鉄の3番出口写したままで

夏が来る 金魚の群れの死するまで鰭濁るまで語る悲歌なし

もしぼくがぼくでないならそれでよし住民票の写しを貰う

悲しみが澱むまでには乗るだろう17系統のバスはまだ来ず

よすがなどなくてひとつの花を折るてごころもない七月のおれ

ぼくばかりが遠ざかるなり道はずれいま一輪の花を啜える

痛みとは永久の慰みいくつかの道路標識狂いたるかな

なにがまたぼくを咎めるだろうか
と街路樹たちのささやきのなか

きみのいまがラージサイズの
ペプシとして再現される
観客席よ

美しい仕事

夏の花おうまがときに咲き誇るパークサイドの街灯のなか

まなざしの光りのおおく吸われゆく雨期の花咲くみどりの小径

うそがまだやさしい真昼 緊縛のバニーガールをひとり眺むる

歌碑を読む老人ひとり古帽のかげに呼ばれてやがて去るなり

十七音かぞえながら指を折るひとりの少女図書館に見る

季語忘る夏のベッドよなぐさみにならぬあかときわれを焼くのみ

視るたびに顔がちがってゐるくせにおなじ声音で話すかの女ら

おもいでもあらじと云いてさみしさもうつくしきかなきみのやまなみ

みささぎにかかる光りかおれたちの過去などまるでなかったようだ

海を売る少女ありしか炎天にかかる雲さえきようは悲しい

宇宙という裁きもありぬ銀河にて名づけられたる朝の咎人

語りとは声の残滓かものがたるひとのかげ読む通訳士たち

かぜまじる
初夏の嵐よひとびとの営みなどがわれを惑わす

かぜわたる
区画整理の跡地にて老夫のひとり杖を投げたり

とことわの花野のありしか炎天の素人土工の頭蓋啼きをり

青嵐来るにまかせて夏草の束をくすねてわれを慰む

ベルボトム逆さに吊す夏の夜の猥語のごとく愛しきものら

はつ夏の水を眺むる凡夫たるゆえなど知らぬ清掃時間

われもまたあたまさげさしひとにみな死ねと祈りし清正人參

鞭のように蛇ふらさがる樹木あり『美少女図鑑』ふと落としたり

方代の額髪青き時代なぞ午睡のなかにひとり現る

よこがきの思想ばかりが照らされて拝むひとりあり
神の莫迦珍

うつくしき仕事ありしか夏の日の父を殺せしわが夢のうち

ドニ・ラヴァンを兄と呼びたきいちじつを生きて羞ぢることもなき夏

少なくともいいのだ
だれも受けぬ如雨露のなかの残り水など

抱えては深くジャンプす
死の色はみなおなじとうあじさいの束

やがて世が夢だと気づくこともあれ

革財布に護符を入れたり

問
奏
曲

ひぐれまの悪魔のようだ　ガス器具の異常警報鳴りやまぬなら

風をまねくひとのようだと誤解して電線工夫の仕草を見つむ

境内を歩む女のひとがいう「神はあなたを見放したのよ」。

ものおもうことのさみしさ道の果て屁糞葛の語る真実

耳鳴りが止まない帰途よ夏の夜の博覧会はまたなお寂し

枕木のつづく地平に暮れかかる雨雲ばかりわれを慰む

乱切りの茄子を算える夏の夜の空調さえもわれを咎めて

ルー・リードの詩集を買わん ニューヨーク・シティの雲が沸き返るなか

世の光り われと他者とをへだてたる情景ばかり眼にて残らん

……だっただっていうおもいも告げず室に坐す夜香木さえ濁れるときは

ああ、ともに交じることなき余生あり セントルシアの夏の妹

憂さ充ちる室の時計に釘を打つ姦夫のごとき一連の業

「星幾たびもめぐる」ならその物語を売ってください

誤解というたがいちがいの道歩む存在たちの雲は寂しい

この雨はつづく
炎がたちあがる心の澱を塗りつぶすまで

此処に願うことなし
朝顔のようなひとさえ隣におらず

虚心にて水面を撫づるようにしてミカドの歌に芯などあらし

愛子内親王の眼のなかをしらじらと三十一文字の呪学はありぬ

牡牝のちがいはあれど過ちは等しくわれの友人なりぬ

国産みの伝説さえも生け贄にするがいいさとおのれの古事記

木々ゆれる あしたのかぜを予感してわれの帽子はきょうも飛ぶなり

夢のなか鰯の群れに追われゆきY字路に立つ／ぎりぎりの家

馬果つることもなかりき草競馬見下ろすのみのわれの祝日

石を飼う女存りしやコクニーのような訛りで躑けるものを

炎昼に焦れるひと波一杯の水を浴みゐる胸汚すまで

よすがなどあらず水場に咲く花を剪る一瞬の夢が悲しい

世界樹の断面

夏の夜の空中庭園夢想する男のなかの熱病止まず

世界樹の断面ばかりかげがいもないものばかり奪われてゐて

パーラーのいちじつ暮れるおれがまだ苺ミルク待ってゐるのに

労働を拒むおれたち 夏はいま禁治産者の五月祭かな

運命を買い求めて来し男ありダービーの日は『優馬』を読みぬ

……しかし、それがほんとうだって証なく草刈り鎌の刃錆ゐる

みなみどり夏のさかりの熱さえもいつわりなどとあえて云うなり

この場所にぼくがゐるのだ 真夜中の一人称をゆらす水風呂

花あんず ゆうびらしさに解けてゆく卑語一覽のささやきのなか

孤悲というおもいちがいに囚われて身うごきできぬ夏の疚しさ

「神がまだゐない夜明けを歩きたい」二宮神社の境内に立つ

黄金の道よこたわる定めとう一語消し去る車を待てり

きりぎりと鋸を挽くひといずれかの未来にんの期待も持たず

つちのえの男が匂うスーパーの閉店時間とうに過ぎたり

赦しなくてまだ立ってゐるよ門の錆の青ばむまでは

心なくて食堂をでる ウェスターン・ドア羽ばたく夜のしじま

スモール・タウン

スモール・タウンつづく駅だらけわれをひとたらしむる窓越しのひとひと

土地騒ぐ宅地造成ボーリング・マシンの吼える声ぞわれ聴く

なぐさみはいらない 手水にぬらす両の手がすがしいから

ためらいはバラ科の果実 棘のごとわが口腔を緊しまる肉あり

天水のあふるる道を渡り来て六甲道にバス訪れず

つれもどす声などあらし喫煙所撤去のさまを遠く見るのみ

あかときに樹は眠りたりしずかなる定型詩文のごとき水脈^{みお}あり

「高価買取」広告看板しずかなる午後よ復讐演ずる女ありぬ

道道におもいだされる辱めがあつてまだに赦せないものたちをおもう

石を抜く土工のひとり空調服のふくらみがやさしい時間

たとえばきみのはるかを流れるものありぬ精肉店の保冷库

なにがなくとも季節の花は咲き乱れ神経症の発作うながす

かたほうの足をかばって歩き去るワンピースの色はやけに青い

おたがいの風を交わして輪廻する砂の城寨おしろのあるところにて

群れたちにはぐれて生きる野の花に思惑なんぞ一行もなく

それぞれのなまえも知らず生きてゆく猿のようなひとなみ寂し

いくつもの眼をひらかせて蓮^{はちす}生むいずれわれらを捕らえんとして

石を飛ぶからすの一羽過ぎてゆく視界のなかの暗黒理力

意味との和解叶わず水飲む
一連の動作・仕草を記録するおれ

枝葉ばかり幹が育たぬ公園の樹を眺めたる野良たちの午後

「ひとふりでシミ・ソバカスに効く」という広告貼られつつあり始発を待てり

獺犬にあざみと名づくひぐらしの声もまだせぬ一本の道

せめていまをとつぶやく女の子たちが飛ぶビニールの縄跳び

来し方をおもふことすらうとましく天日に曝す冷凍肉を

真夜中のサービス・エリア かたほうの子供靴のみ発見されし

窓が飛ぶ 上昇率をあげる不安あつてきみらしいまなざしが暗い

枝を折る 妬心のなかのさまさまを庭の櫓にからかわれては

存在のやましさをばかり漏水を受けるバケツがきょうも涼しい

躯体工事やがて夢のごとく終わったりひざかりを歩く空調服の男たち

LED照明冴えるわが室のなかいつまでもつづく水の音聴く

炎天に立つ墓ひとり夜を待つ供う花さえなんだかなしい

呼び声もなくて夜ふけに立ち止まる信号灯の点滅もなし

光りなどなくてひとりの厨にて陰莖冷やす盥の水よ

陽ざかりの輸送貨物が停車する・歯痛に悩む夏の午後2時

きみのまぶちが夏の光りに薄らいでた
たいま時を刻んだよ

詩に淫すこともな
ければ八月の縊死の
牡犬駈け廻るなり

ルード・ボーイたち

鍵穴が合わない夕べ地階にて癌検診の通知受取る

裏階段上るだれかのかげをいまひとりじめする身勝手ばかり

布ひとひら浮かぶ人工河川やがて来るだろう裁きなど忘れつ

〈屠〉という字やがて葬らるる字なり夏の蠅集る場所もなくて

咲きそめる花は嵐か 従業員通用口に吹きだまるもの

愛の経験もなしに道ゆくわれのなかを走り抜ける夏のしぶき

パリ祭のルード・ボーイのごとくいま髪撫でつけるわがマグ・シヨット

第一級殺人一報告ぐ画面冷たき切桃の罐詰をあくる暗い真午の室

だれだった？ かげ踏み遊び 誘い来る 群青色の男の子って

かえりきて上着を降ろす湿度計高まるなにが不安をあおる

横倒しのハーレーダビットソン眠る路上にて遠巻きに小火騒ぐ隣人ありぬ

前線の雲もやがては見果つるに悪魔主義者もしずかに去りき

羞じらいもなくて眼をひらくひと／「きみのようだ」と通信回路

椿象^{かめむし}のゆくえをおもう俎板のうえを這ってはじきに消え去る

ことば少なげに愛を語る男に遭って
いまだぬぐえない背徳感

へみしガンという渾名の猫が飛ぶ夏の庭にて語る亡命

「この夜がいまに正しい昼となる」——夢の日記に書かれた科白

若さもてぬぐう汗かな少女らの悲歌すら遠き夜の二部観る

中央電算室爆発する真夏の朝顔さえ愛しい時間

なおも雲がつづく道の果てわずかながら願いなど持ちぬゆうぞら

どこかでいれちがうひとがゐる駅のなかを漂う空洞としての時刻表

夜泣きする子供の声が悲しげなときがつづいてひとりつまづく

ゆくえ知れずの夢——「アメリカ」を追跡する大暑のなかをさまようがまま

〈L'America〉と歌う男よ、黄金に代わるものなどこの土地になし

荒れ野にて花が咲いたよ／きみが持つ神託なんぞなかったように

夏の雲に夾まれてゆくぼくよぼくよと一人称解体できぬ真昼

生田川インターちかく主婦たちが降霊術を学ぶ木の洞

Lie Lie Lie／やがてもみなうそとなる第二級河川反逆したり

サイレンが祝詞のように鳴り渡る駅また駅の神も欠伸す

蝦蟇眠る

一篇の詩さえも痛苦 根菜のまっかな茎を嚙るみたいだ

トマト罐落下を見つむわれひとり爆発望み／夏は去りゆく

唇をそつと切るよな調べかなゆうなぎはるか迫るを待てり

なにが なにがきみをかりたてるのか 秋の兆しにあとずさるのみ

萩の花咲くを待ちをり残暑にてふくらはぎまで水浸しなり

ゆく夏にとり残されて汗を掻く知羞草おじぎそうさえなにも云わない

抱えたつものもなかりき荒れ野にてだれに捧ぐる歌なぞも存らず

……と、おもえてならず夏の根の枯れていっぽん死ぬまであかく

云いわけのかさなるゆうべそれぞれの場所を報すはバードコールよ

云いつのる不安ばかりが高まれり残暑のなかの電波塔たち

かのひとの不在をおもう漏水の修理終わらぬ地下道にさえ

もはや愛などいらぬ両の手で水を掴んだ一瞬の夏

みみずくの眠りのなかに迷い来し男は高所恐怖症なり

暮れなずむ夏のゆうべを歩きゐてふいに落ちたり護符のひとひら

灼かれをる男たち現場作業終わらぬ週末　まだ眠い

ふみいそぐ叢寂し　うしろから大人のおとこどうどうとして

定時制女生徒眠るバスの席　わがへ夜の学校へふとおもえり

おろかだという声がして空蟬ばかり手にて零れる

ゆうやみにせまるひとりきりどおしぬけていま落ちたり

早漏治すべく運動もはやだれも愛するものなくって

beadhead 聴きつつ天気予報覧る そうかあさっては嵐

いまさらにきみを忘れる土臭い搬出口を見送りながら

皮膚を突く棘　そのままに世界はあり北半球に秋は来たり

おれの名を忘るなかれと云いそびれまたこの室に蝦蟇眠りたり

あとがき

祈りでは主に嘆願なんかできやしない

ジム・モリスン

5年まえに初めての歌集をだした。2年まえから歌誌『帆(han)』を主宰し、短歌についての考えを言語化して来た。わたしはそれまでの言語表現を短歌一本化するため、小説を片づけ、詩を片づけてきた。この歌集は歌人としてのわたしの第一歩だ。多くの方法から三十一文字を撰んだということの証のようなものだ。先月、刊行した最後の詩集『不適當詩劇』とおなじく、書き下ろしとかたちをとって、書きためた多くの歌篇を未収録のままにした。それはいつか編輯するとしても、この歌集こそがいまのじぶんの可能性を極めた1冊のつもりだ。

短歌をやっているつくづくおもうのはもはやもどり道はないということだ。言葉の即時性、即効性という面で、短詩の伝統詩形を超えることはできない。散文表現はけっきょく現実原則の再現でしかないからだ。わたしはもうこの数年、ノンフィクションを除いて、そういったものが読めなくなった。

じぶんのなかで散文家としての側面が失われたことで、その受容体も一緒になつて消えてしまったようにおもえる。いささか寂しいが、それもしようがない。わたしは短歌の律によつて、現実原則から空想原則に梯子をかけようとおもっている。詩の作用とは此岸と彼岸を結ぶことである。寺山修司はヘリズムはつねに現在進行形である」と書いている。読み手と書き手が共有し、且つ共謀するリズムによつて一行の詩を完成させる、——これは再現でなく、生成なのだ。わたしが日常を祝祭化ができるのは定型詩文に於いてのみだ。

短歌という呪術を最大限に活かしたい。それは五・七・五・七・七を守るということではない。いまあるリズム、すなわち集団としての国家への挑戦であり、暗数としての声による発語である。わたしはただ見きわめたい、現実と、幻想の地平を。共感といったものにはまったく興味はない。わたしにあるのは変身への渴望である。一瞬のうちにひとりの運命すらも変えてしまふ歌を求めている。祈りではだめだ。——「では、お見せしよう——変身！」。

’24年8月・某所にて

著者来歴

中田満帆 なかたみつほ／⁸⁴年生まれ、神戸市・出身在住。⁰⁴年より詩人・童話作家＝森忠明に師事。定時制高校卒業後、居場所を転々として過ごす。郵便配達人、倉庫作業員、一般土工などに従事。¹¹年より神戸市中央区に定住。作品の販売を始める。¹⁴年より出版局『*issuing person's press*』を主宰、詩集、小説、画集などを出版。¹⁹年に歌集『*星蝕詠嘆集／Ec lipuse Arioso*』を出版。現在、歌誌『帆(han)』を主宰。

森 忠明 もりただあき／⁴⁸年生まれ。詩人・童話作家。立川市出身。『高3コース』投稿欄を経て、寺山修司に見いだされ、以後師事。演劇実験室『天井桟敷』、初代文芸部長。童話作品に『きみはサヨナラ族か』、『グリーン・アイズ』ほか。詩集に『ハイティーン詩集』、エッセイ集に『ねながれ記』、『ともきたる——空谷昴音録』ほか。

本作は書き下ろしである。

世界樹の断面

Copyright © Mitzho "Mampan" Nakata, a missing person's press 2024

著作・編輯・装丁・写真・発行／中田満帆

題名・序文／森忠明

発行所／a missing person's press

発行日／2024年09月09日・初版第1刷

神戸市中央区生田町1-1-13 新神戸マンション北館303号

[電話] 078-200-6874 [Mail] mitzho84@gmail.com

ISBN978-4-9909502-8-6 C0092 ¥ 2500E

Printed in Japan

Made in Kobe